

幼児と音楽(2)

野 上 俊 之

「発達の」音楽プログラムの意味

20世紀後半の音楽教育は長足の進歩を遂げている。しかし、著名な音楽教育家であるDalcroze, Orff, Kodaly, らの貢献にもかかわらず、Piaget, Bruner, Montessori, Steinerらの人間の発達理論を十分に考慮した、広く受け入れられる音楽プログラムは、いまだに進展していない。

子どもに音楽的活動を体験させる“発達の”音楽プログラムについて語るとき、彼らの発達の各段階における“レディネス”という重要な概念を十分に考慮しなければならない。子どもたちが“準備ができていること”は、学習が努力せずにできるとともに流動的であるといえ、それは子どもと教師に大きな楽しみでもある。このことは、読み、書き、計算のような基本的学習同様、音楽学習にも当てはまる。遊びを通しての教育は、後の正式な教育の土台として基本的に重要であり、積極的な態度を奨励するため特に有益である。この種のアプローチは、発達の音楽プログラムの基礎を形成するに違いない。すなわち、音楽的情報が早めに楽しいゲームの形で提示されたとき、子どもたちは多くのことを学ぶのである。

音楽発達において、将来のすべての音楽活動の基礎となる2つの重要な要素—“音程に合わせて”歌う能力と“リズムに合わせて”演奏する能力—を弁別するのは容易である。両要素とも幼い頃から徐々に獲得され、一般的に7～9歳で確立する。このような能力から判断すれば、幼児の音楽的成果が、特にグループで音楽するときその多くは全く音楽的な響きでないように、彼らの音楽的未熟さは、両親、保護者、教師らに早い時期からの音楽活動を始めることに対して消極的な一因となる。

しかし、幼児のグループによる音楽に対する大人の判断よりも、より重要なことは、子ども自身がやっていることに夢中になり、楽しむことである。初期の音楽的成長において、批評やあら捜しは不適當であろう。幼児の音楽センスは、積極的な刺激や音楽活動に対する興味によって育つのである。

小さな子どもは、探求したり自分自身を表現する必要がある。幼稚園において、このことは言葉や絵画同様、音楽にも当てはまる。最良の音楽学習環境は、まず聴覚的弁別力を伸ばすように音楽が知覚されることである。すべての音楽活動は聴くことに基づいており、幼稚園における音楽的発達の第1段階として、聴くことのゲームは、徐々に特殊な方法で子どもが音質を区別することを可能にし、音楽プログラムの論理にかなっているといえる。

幼児は、さらさらと音がする一切れの紙、自分の家で作ったがらがら、カチカチという時計、よく響くシチューなべからベル、チャイム、ドラムまで、さらに、いじくりまわせるような伝統的な楽器を、自分自身でその音質を探求する多くの機会に恵まれる必要もある。もっとも、幼児は様々な道具をそのように扱うのであるが。保育所や幼稚園において、サウンドボックスとかサウンドコーナーは、絵の具や筆と同じような意味がある。子ども自身の想像が尽きることがないように、音の創造的活用の機会も果てしない。大人にとっては結果的にいらいらする不快な音であっても、子どもにとっては非常に感受性豊かに聞くことになり、それはやがて音の探求活動を方向づけることになるであろう。

歌うことは、文化に関係なく、すべての小さな子どもにとって楽しい活動である。さらに、親子

のきずなを深める一因ともなり、社会的、文化的発展にとっても重要である。歌う活動はグループの確立にきわめて貴重といえる。保育の始めと終わりの儀式的な歌唱は、“教室”の内外における子どもの生活に意味深長なかけ橋となる。つまり、記憶した歌は、いつとはなく突然現れ、その歌を自然に一人で歌い出すことは、以前の活動をこちよく思い出すことになるのである。

歌うことは、小さな子どもに安心感と親和感を引き起こす。家庭や学校における歌唱の時間に新しい歌を徐々に取り入れることで、多くの有名な題材に接することができる。有益で適切な歌のレパートリーは、すべての文化に見られる子どもの歌の貴重な伝統的財産である。西洋において、この財産は常に人気のある童謡とか伝統的な子もり歌を含んでおり、家庭や保育所における子どもの音楽的栄養の基準を成している。これらの歌は、家庭で両親と子どもと一緒に歌うことによって、特に意味が生じるのである。最近作曲された子どもの歌には現代的で覚えやすいものがたくさんある。これらのいくつかは確かに有益であるが、非常に多くの世代が子どものとき享受した、伝統的な“マザーグース”の歌に取って代わることはないであろう。伝統的な子どもの歌は、一般的に覚え易く歌い易い。それゆえ、人種的に異なった子どものグループ相互の文化的交流促進に役立つといえる。

歌うことは、言語の発達を促す活動でもある。というのは、概して、音楽は右脳、言語は左脳に作用するので、音楽とことばの両方を含む歌唱は、脳の半球を相互に刺激するからである。幼児は歌によってぞうさなく幾度も、その意味にかかわらず、ことばを学ぶだろう。このことは、外国語および母国語の歌、両方に当てはまる。それゆえ、親や教師が、個々の歌を音楽的価値のみならず言語上の利用として扱うのであれば、子どもが歌うことそのもののみならず、歌に関して十分に理解するための学習方略を開発する必要がある。これは、音楽を第2言語の学習手段として用いるとき特に重要になる。

動作と結びついた多くの伝統的な子どもの歌は、うたあそびとして知られている。〔今日、日本の

保育現場に取り入れられている世界的に有名なものには、輪になってあそぶ Here We Go Round the Mulberry Bush (マルベリのまわりをまわろう)、くぐりあそびの London Bridge is Falling Down (ロンドン橋) などがある。〕これらの歌の内容を脚色する本質的価値が、幼稚園においてとりわけ有益である。そして、これらの活動はダンスとのつながりに役立つ。ダンスは一般的に音楽と結びついており、子どもは早い時期から、徐々に運動をコントロールすることによって、様々な動きで自然に音楽に反応するようになる。家庭や幼稚園においては、音楽に反応する動きを常に奨励し賞賛すべきである。運動調整することによって、子どもの拍子感やリズム感は発達していくのである。そのため、運動は音楽的知性を刺激することに、きわめて重要な役割を演じているといえる。音楽的知性の十分な可能性の発達を望むのであれば、運動を決して妨げるべきではない。

すべての音楽演奏は、高度な運動神経と微妙な筋肉コントロールを必要とする。しかしながら、このことは、特にうまく運動調整できない子どもが、りっぱな音楽家になる能力に欠けているということではない。同様に、“音痴”と思われる子どもが、優秀なリズム的能力の持ち主かもしれないし、りっぱなダンサーになる潜在的な能力があるかもしれない。初期学習において、音楽とダンスは別々の活動として行うべきでない。というのは、小さな赤ん坊でさえ、活発な動作で音楽に反応し、このパターンが幼児期を通じて継続するからである。ダンスの時間は、音楽の理解に大いに貢献するし、子どもは男女の別なくそれを楽しむであろう。

しばしば子どもたちは、同年齢の子どもと同じように歌えないから音楽的能力がないと思われることによって、さらなる音楽的発達を妨げられている。これは悲劇的なことであり、自尊心を不必要に傷つけることになる。このことは後年に、また他の多くの発達領域にも影響するであろう。母親の中には、自分自身を“非音楽的”だと思っている人が多くいる。彼らは、赤ん坊に歌ったり、子どもを音楽的に育てることに対して、自意識過剰になっているといえる。彼らの子どもを、典型

的な“遊び”の一つとして音楽活動が奨励されている現代的な保育集団に参加させてみるとよい。そこで子どもが音楽にかなりの興味を示せば、子どもの音楽的才能の芽生えが親の責任であるというよりも、子どもの情報環境の働きであると思うだろう。親子関係に新たな要因として音楽経験が加わり、展開されたとしても、その貴重ですばらしい感情的かわりを子どもたちは気づかないだろう。

初期学習における音楽と他領域との関連

今までに多くのことが提言されている。第1に、音楽的知性は複雑に相互にオーバーラップする能力全体から成る。そして第2に、一つの因子の不十分な発達は、他の優れた因子によって補償される。子どものもって生まれた能力が“専門家”の定めた要求にまで達しないからといって、子どもの音楽教育を否定することはない。もちろん、音楽の“専門家”の資格については注意深く検討する必要がある。子どもの音楽的能力判定にきわめて適任の人物は、他の専門知識の特殊な領域よりも、プロの音楽家自身であろう。

すべての子どもの教育における音楽の役割を考えると、音楽的知性がGardnerの提唱した他の5つの知性と重複し、相互に関連するということが心に留める必要がある。これが確かであれば、音楽は、初期学習の周辺へ押しやるよりも、他のすべての知性、すなわち、言語学、身体運動感覚、数学的論理学、空間および個人的知性の発達と密接な関係にあるので、その中心を占めるべきである。言い換えれば、音楽は人間の全体的発達に影響するといえる。

次の状況を考えてみよう。16人の4歳の子どもが床に座って伝統的な童謡、Johnny Works with Five Hammers を歌っている。最初の“one hammer”の所で、彼らは音楽に合わせて右手のげんこつで床を叩く。次に左手のげんこつ、右足、左足で叩き、頭をたれる。この動きを詩の一行ごとに行い、最後の“Johnny”の所で疲れて眠る。それぞれの知性は次のように明らかにすることができよう。歌のことは言語上の自覚を促す。音楽

的知性、とりわけピッチとリズムは、リーダーの声と身振り、(この段階では、おそらく正確にはできないだろうが)音程とリズムに合わせて行うときに発達する。子どもの運動として、それぞれの手足と頭を独立して動かすことは、高度な運動調整を要求する。つまり、身体の筋肉運動感覚を明らかに刺激する。子どもは、必然的かつ結果的に“具体的”な方法で、1から5まで数えることを学習する。これは数学的論理の知性を伴う。子どもは自分の動きの空間的關係(まず右、次に左、腕から下の足へ、そして、上の頭へ)を確実に気づく。最後に、個々の子どもは、この活動への参加に責を負う。つまり、彼はリーダーのあとに従い、他の子どもの成果と自分のそれを調和させようと努力するのである。歌の終わりに、全員疲れて眠っているふりをするが、眠りはたくさんくすくす笑いで中断される。それは、この体験が、肉体的、精神的エネルギーを解放するとともに、楽しいからである。

“形式的”な学校生活、特にその初期において、子どもが読んだり書いたりしなければならぬとき、あるいは、親や教師の相当な圧迫の中で成功したり、同級生と肩を並べて行かなければならぬとき、音楽が、いかに感情的、知的、運動的発達を刺激するか、いかに初期の社会性の発達に有益か、また、いかに緊張した活動に慰みを与えるか、について非常に多くのことが言われている。学校の音楽が気晴らしであるという認識は、多くの親や教師に、音楽が人間の学習にとって根本的に重要な学科であることを過少評価させることになる。音楽の授業の“楽しみ”は、カリキュラムの他の分野における新たな段階への取り組みにも好影響を及ぼすであろう。

英国の音楽教育の近年の発展は、小学校における音楽コンサルタントの実施にある。これは、相談相手(優れた音楽の専門家)の援助によって、教師が他の学科同様に子どもの音楽指導の責任を負うことを勇気づける。この発展の非常に大きな成果は、音楽を他の学習形態と関連して扱う可能性をもたらしたことにある。もはや音楽を何か“特別なもの”であるとか“区別すべきもの”と考える必要はない。教師は自分自身の音楽的知性と

その可能性を認識するであろう。教師は“最初の音楽教師”である親の役割を演じるといえる。一方、“コンサルタント”としての音楽専門教師は、学校の非常に貴重な課外音楽活動において、多くの時間を自由に費やす。その活動では、彼の専門技術と訓練が十分に活かされるのである。

読譜について

音楽の“不可思議”なところは、その記譜法にある。この方法は、元来西洋の伝統的芸術音楽に関して用いられていたものであり、音楽を伝えるには確かに有効である。読譜能力は、伝統的な作品から最近作曲されたものまで、ばくだいな曲目の演奏を容易にする。また、各自の読譜能力に応じて、自分自身で演奏曲目を大いに研究することができる。

既述したように、いつまたいかに楽譜を導入するかは議論的になる。子どもが文化のシンボルである文字や数字を学習するのと同じ時期に、読譜の基礎を取り扱うことは確かに可能である。私は、4歳児が簡単なリズム・パターンを読んだり、作ったりするのを見たことがある。その課題は、可能な限り想像的でゲーム的な題材を用いており、彼らにとって大きな喜びであった。この年齢の子どもは、楽譜が適切な機会に与えられれば、より難しいものでも読むことができるといえよう。

電子楽器、特にMIDI（楽器とマイクロコンピューターを連結したもの）の発達は、子どもに早い時期からコンピューターゲームを通して、いかに読譜を教えるかについての展望を広げた。比較的安価なシンセサイザーの出現は、以前よりも音楽を身近なものにしている。これらの楽器の出現は、初心者に新たに入手した楽器を利用して、ポピュラーソングの読譜指導をいかにすべきかという教育学上の課題になる。

楽器における創造的機会もほとんど無制限であり、とりわけティーンエイジャーは反応が早い。今日、音楽教育関係者の考え方や方法は、概して、新しいテクノロジーの出現に乗り遅れている。ポピュラー音楽教育の興奮するような新たな可能性を十分に開発するために、音楽教師は生徒に追い

つかなければならない。一般的に行われているものは、年長の子どもの対象としているのであるが、0から6歳の市場が開発されるのも間もなくであろう。

器楽教師の役割

人間の全体的発達に重要な役割をなす音楽的活動を中心とする教育方法は、おそらく、楽器の学習に対する興味をより刺激し、優秀な器楽教師の大需要を引き起こすであろう。新しいテクノロジーすべてが、一つないしそれ以上の伝統的楽器の演奏を習う興奮に突然影響することはないだろうし、実際、器楽のレッスンは、学校や家庭における音楽活動の役割を強める手段であってすべてではない。音楽への興味が人生の早い時期から刺激された子どもは、少なくとも一つの楽器は習いたいと思うだろう。

ある特定の楽器指導における“レディネス”の兆候は、何の楽器を与えるかではなく、何の楽器を習いたい自分自身で選ぶ個々の子どもの能力にある。このような状況において、楽器指導を始める平均年齢は、さらに早くなるであろう。しかし、“レディネス”の概念を厳密にいうならば、条件から外れる子どもは少ないだろう。

才能のある子どもが家庭や学校で音楽に接するとき、その才能を顕にする機会はたくさんある。彼はMozartの幼少の頃のように、音楽的発達段階をすみやかに通り抜け、“標準”より優って行動するであろう。とはいえ、このような子どもはまれである。彼らは、天賦の才を有し、特別な配慮が必要である。このような神童に、発達にふさわしい環境が与えられたら、社会全体としても非常に有益であろう。すばらしい才能を持った子どものための“音楽施設”を提供することは、世界の優れた音楽専門学校の責務—この責務は歓迎されるであろう—といえる。しかし、そのような施設では、普通より有能な、あるいは天賦の才のある子どもに与える専門的な音楽プログラムが、過度にならないよう注意しなければならない。その高度なレベルの訓練は、誤った希望や個人的な不安定を生む原因になるのである。Gulbenkianレ

ポート（1987年）によると、小学校教育の終わりまでに同年齢の子どもよりも上手に演奏する能力は、真の才能の存在を示すことにはならないと述べている。また一方で、専門家は、特別な音楽才能は何歳であっても容易に発見できるし、それは極めてまれであると考えている。

有能な子どもは、多くのスポーツ訓練のように、その過度に発達した感覚のために、成功の重要性や音楽演奏の最も優れた基準として、容易に人身御供となる。このできるだけ早い年齢で完成を得ようと努力することは、人類を宇宙探検に駆り立て消滅させることと同じである。過度の特殊化に対しては“十分である”と声を大にし、広く社会にあるすべての種類の知識と資源を共有することにバランスを矯正するときではなかろうか。確かに、専門家のグループは子どもの幸福に関心をもっているのだろうが、すべての子どもが自我実現を高める機会が与えられる21世紀の国際社会と優雅で均斉のとれた全体論的方法による多方面にわたる発達を保障する教育システムの実現に向けて努力すべきである。このような社会において、音楽は重要な役割を演じるのである。

※Anne E.Boyd, 'Music in early childhood'
1989. Selected Scientific & Technical Report,
Dota No. TF-5696,テクノフォーラム.

おわりに

現代は競争社会である。昨今の情勢から判断すれば、この傾向は今後ますます拍車がかかるだろ

う。能力を見につけることは個々の人間がバラバラになっていくことであるという現実の中で、いかにして人間相互の関係を豊かなものにできるのか。人間同士の出会い、感性のぶつかり、心のつながり、表現力などが不足している時こそ、その一つとして、幼児期からの音楽の位置づけを再検討すべきではなかろうか。

音楽におけるレディネスの問題は、環境が整い、音楽したいという欲求が高まる背景、言い換えれば、自然な発達を助ける継続性と深く関係しているといえよう。幼児の音楽に対する漠然とした、断片的な感じが、様々な表現手段を用いて、しだいにより明確なものとして形を整えていく。言葉だけでなく、リズム、メロディーが伴うことによって生活体験として増幅していくのである。そのためには、下地となる音楽経験を吟味しなければならない。逆説的であるが、芸術や学問にはもともと完全なものがないからこそ、年齢に関係なく音楽的に質の高い経験が必要である。音楽的成長を目的とした教育は、まず音楽を受けとめ、反応することから始め、異質なものと接点から飛躍、発展させる過程を継続的に捉えることであろう。さらに、Boydが援用しているGardnerの提唱する知性のように、音楽を中心的手段として、心の栄養源となるような捉え方は興味深いものがある。いずれにしても、幼児の音楽的活動は、生活や遊びと密接な関係にあるので、幼児の心身の発達や興味関心を考慮して保育者が音楽を媒体としてかわること、相互作用のなかでつくり出されるものが重要である。そして、結果的な子どもの人格的成長、音楽的知性の獲得が幼児期の音楽のあり方の方向づけを意味することになるのである。

(助教授)